

## 発達障害児の心理的負荷による「固まる」現象に関する調査研究

佐藤 翔子 東京学芸大学教育学部  
 橋本 創一 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター  
 佐藤 衣織 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター  
 山口 遼 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所  
 李 受眞 浜松学院大学  
 井上 剛 東京学芸大学附属特別支援学校

**要 旨：** 発達障害のある児童の内向的な感情表出の一つである「固まる」現象について、実態の把握とその支援を検討するため、質問紙調査を行った。調査の結果、障害種にかかわらず、「自分の思った通りに事が進まない場面」、「課題ができなそうだと感じた場面」、「何かに失敗した場面」は児童が「固まる」きっかけとなりやすく、固まった児童の多くは「動かない」または「無反応・無表情・黙り込む」状態になることがわかった。また、教員は「固まった」児童に対して、気持ちを落ち着ける環境を整える・時間を置く等の受容的な対応や、気持ちの切り替えを促す働きかけを行っていた。児童が固まる要因として考えられる、見通しが持てないことへの不安を軽減させることや、「固まる」以外の適切な感情表出を身につけることに焦点を当てた支援の重要性が示唆された。

**Key Words：** 発達障害、「固まる」現象、情緒の問題

## I. はじめに

文部科学省(2021)<sup>2)</sup>では、情緒障害を「周囲の環境から受けるストレスによって生じたストレス反応として状況に合わない感情・気分が持続し、不適切な行動が引き起こされ、それらを自分の意思ではコントロールできないことが継続し、学校生活や社会生活に適応できなくなる状態」と定義している。特別支援教育に関する調査(2022)<sup>3)</sup>では、通級による指導を受けている児童生徒のうち、「情緒障害」として通級による指導を受けている児童生徒数は 20,000 人を超え、また、自閉症・情緒障害特別支援学級には約 151,000 人が在籍しているなど、他の障害に比べ非常に多いことが明らかにされた。情緒障害は、発達障害(自閉症)に起因した言語発達や対人コミュニケーション、感情コントロール等の困難さにより、社会的不適応が生じている場合と、選択性緘黙やチックなどの精神症状、不登校、情緒不安定(多動、興奮傾向、かんしゃく癖など)といった心理的な要因によって起こる様々な状態が不適応につながっている場合

の 2 つがあるとされている。

武藏(2013)<sup>4)</sup>は、発達障害のある児童は、認知や社会性の発達にアンバランスさを示し、それが感情や情緒の不安定、感情表出を含むコミュニケーションや対人行動での困難につながる人が多いと述べている。また、子どもの感情表出について菅野ら(2016)<sup>5)</sup>は、その方法を「外向的攻撃型」「マイペース表現型」「内向的逃避型」の 3 つに分類している。この分類のうち、「外向的攻撃型」に該当する児童の暴言・暴力等の攻撃的な言動、癩癩などの外交的で激しい感情表出は、自傷や他害など大きなトラブルにつながる恐れがあることから、問題視されやすく、多くの研究でその支援について検討されている。一方、「内向的逃避型」の「些細なことで動揺し、固まってしまう」「集団参加が必要な場面で固まる」といった内向性の表出とそれに伴う問題については、前者と比較して注目度が低い。しかし、これらの状態は、他児との消極的な関わりによって生じる別のトラブルの要因となったり、「固まる」状態になってしまうことで、立ち直るまでの間学習や活動に参加できなくなったりすることから、対応すべき情緒の問

題の一つであるといえる。

本研究では発達障害児にみられる「固まる」現象について、その実態を明らかにし、内向的感情表出をする児童に対する支援について検討することを目的とする。特に発達障害児においては、自己表現することの乏しさがあり、内向的な感情表出がどのような理由で出現し、それらが何を表現しているのかが明瞭ではないことが、支援の検討に際しての課題である。尚、先述した「固まってしまおう」と同様に、「無動」「無言」といった症状が表れる、「カタトニア」という精神疾患等に見られる症候群がある。しかし、カタトニアは15歳から19歳で発症することが多く、児童で診断を受ける者は少ない。そこで、本調査における「固まる」とは、『本人にとって不快な感情をきっかけに、まるで殻に閉じこもる様に固まってしまい、声をかけても動かず、何事にも取り組めなくなってしまう状態であり、その様子が「カタトニア」などの精神疾患によるものではない。』と定義する。

## ● II. 方法

### 1. 調査方法・対象者

2020年8月に、全国の知的障害特別支援学校小学部632校、首都圏の小学校特別支援学級685校、首都圏小学校情緒障害通級指導教室979校の計2296校の担当教諭を対象に質問紙調査を実施した。調査の依頼状と質問紙(同じ内容の質問フォームにリンクするQRコードを印刷したもの)を送付し、回答済みの質問紙を返信用封筒で返送するか、QRコードを読み込んでGoogle formから回答するかを選択してもらった。回答者は各校1名とし、その選出は各校に一任した。回答のあった825件(回収率35.9%)のうち、『担当するクラスに「固まる」様子が見られる児童が在籍する』と回答した421件を分析対象とした。

また、質問紙には先述した「固まる」発達障害の児童の定義を記載し、「固まる」様子について回答者との共通理解を図った上で、該当する児童を一人思い浮かべて回答を行うよう求めた。

### 2. 調査内容

#### (1) 障害診断について

対象児の障害診断、あるいはその疑いについて、選択肢(“自閉スペクトラム症(ASD)”、“注意欠如・多動症(ADHD)”、“学習障害(LD)”、“ダウン症

(DS)”、“発達性協調運動障害”、“情緒障害”、“その他”)の中から該当するものを選択してもらった(複数回答可)。“情緒障害”、“その他”を選択した場合は具体的な診断名の記入を求めた。

#### (2) 「固まる」状態像について

①「固まる」状態を引き起こすきっかけ  
対象児が固まるきっかけとして考えられる7つの場面について、様子が見られることが多いものから順位をつけるよう求めた(1.勝負事で負けた場面、2.何かに失敗した場面、3.大人に甘えたい、かまってもらいたい場面、4.前に出て、発表しないといけない場面、5.自分の思った通りに事が進まない場面、6.課された課題ができなそうだと感じた場面、7.友達にばかりにされたり、けなされたりした場面、8.その他)。その他では具体例の記入を求めた。

②「固まる」ときの姿／③「固まる」状態になってしまった児童への対応／④「固まる」状態から立ち直るまでの時間／⑤「固まる」状態から回復する際の様子

②～⑤は自由記述により回答を求めた。

### 3. 倫理的配慮

いずれの調査も対象者には研究趣旨を説明し、承諾を得た上で、研究倫理に配慮して実施した。

### 4. 分析

#### 1) カテゴリー作成

自由記述で回答を得た項目について、KJ法で分類し、カテゴリーを作成した。

#### 1. 「固まる」際の姿について

大カテゴリーとして“1:移動・姿勢、2:表情・表現”、その他“が抽出された。“1:移動・姿勢”の下位カテゴリーとしては、“①動かない(座り込む、立ち尽くす)”、“②逃げ込む・隠れる”、“③寝転がる”の3つが抽出され、“2:表情・表現”の下位カテゴリーとしては“④無反応・無表情・黙り込む”、“⑤視線を合わせない・一点を見つめる”、“⑥泣く・泣きそうになる”、“⑦暴言・暴力・衝動的な行動”、“⑧不快な表情”、“⑨拒否語・返事のみなど”の6つが抽出された。

#### 2. 「固まる」現象への対応について

大カテゴリーとして“1:行動促進に向けた積極的介入”、“2:行動停止を容認する受容的対応”、“その他”が抽出された。“1:行動促進に向けた積極的介入”の下位カテゴリーには、“1-①話を聞く、気持ちの言語化”、“1-②別課題や方法の提示”、“1-③好きな活動を勧める”、“1-④安心させる声掛けをする”が抽出された。“2:行

動停止を容認する受容的対応”の下位カテゴリには“2-①移動させ、クールダウン”，“2-②その場でそっとしておく、待つ”，“2-③時間をおいて声をかける”，“2-④見通しを伝える”が抽出された。

3. 「固まる」状態になってから回復するまでにかかる時間について

①5分以内、②6-10分、③11-15分、④16-20分、⑤20-30分、⑥31分以上、の6つに分類した。複数にわたる時間を回答したもの(例:10-30分)には、複数回答として扱った。

4. 「固まる」状態から回復する際の様子について

“①何事もなかったかのように活動に参加する”，“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”，“③少しずつ話始める・質問に答え始める”，“④表情が和らぐ”，“⑤時間や活動の区切りから切り替わる”，“その他”が抽出された。

## 2) 障害種による比較

障害診断についての回答をもとに、障害種別に5つの群に分けた。各質問項目について群ごとに単純集計し、平均値や割合を算出した。自由記述の項目はカテゴリーに当てはめて集計した。また、群間、群内での回答の差を検討するため、 $\chi^2$ 検定を行った。分析には js-STAR XR+および HAD17\_206<sup>4)</sup>を使用した。

## III. 結果

### 1. 障害診断について

障害診断についての回答をもとに，“ASD+ADHD 群”，“ASD 群”，“ADHD 群”，“DS 群”，“その他の障害群(以下、その他群)”の5つの群に分けた(“疑い”を含む)。ASD+ADHD 群の児童は47人(11.4%)、ASD 群の児童は189人(45.8%)、ADHD 群の児童は43人(10.4%)、DS 群の児童は41人(10.0%)、その他群は93人(22.5%)であった。障害種ごとの人数の比較のため $\chi^2$ 検定を行ったところ、群間に有意な差が見られた( $\chi^2(4) = 194.990, p < .01$ )。残差分析の結果、ASD 群が他の群よりも有意に人数が多いこと、その他群がASD 群よりも有意に人数が少なく、他の群よりも有意に人数が多いことがわかった(いずれも  $p < .001$ )。ASD+ADHD 群、ADHD 群、DS 群の間に有意な差はみられなかった(いずれも  $p > .05$ )。

### 2. 「固まる」状態像について

①「固まる」きっかけ

各順位でその項目が選ばれた数をまとめた結果、1位として回答が多かった項目は“5.自分の思った通りに事が進まない場面”(ASD+ADHD 群:21件/48件、ASD 群:64/224件、ADHD 群:16/50件、DS 群:13/58件)であった。2位として選ばれたのが最も多かったのは“6.課題ができなさそうだと感じた場面”(ASD 群:48/142件、ADHD 群:35/13件、DS 群:9/26件、その他群:18/71件)、3位は“2.何かに失敗した場面”(ASD+ADHD 群:8/29件、DS 群:8/25件、その他群:14/55件)と“6.課題ができなさそうだと感じた場面”(ASD+ADHD 群:8/29件、ASD 群:29/109件)であった。

また、「固まる」きっかけに差があるかを検討するため、1位を3点、2位を2点、3位を1点、4位~8位を0点として恣意的に点数化を行った。“5.自分の思った通りに事が進まない場面”，“6.課題ができなさそうだと感じた場面”，“2.何かに失敗した場面”は複数の群で平均点が1点以上であり、「固まる」きっかけになりやすい場面であることが分かった(Table 1, Fig.1)。

次に、平均得点に対して、群ごとに1要因分散分析を行った結果、すべての群できっかけのみられやすさに有意差があることがわかった。(ASD+ADHD 群:  $F(7,322) = 14.7, p < .001$ ; ASD 群:  $F(7,1239) = 34.3, p < .001$ ; ADHD 群:  $F(7,287) = 17.1, p < .001$ ; DS 群:  $F(7,259) = 10.6, p < .001$ ; その他群:  $F(7,623) = 13.8, p < .001$ .)

### ②「固まる」ときの姿

ASD+ADHD 群(回答者数:46)では“①動かない”の回答が最も多く31件(34.8%)、次いで“④無反応・無表情・黙り込む”が18件(20.2%)、“⑦暴言・暴力・衝動的な行動”が10件(11.2%)の順で回答数が多かった。ASD 群(回答者数:187)も同様に“①動かない”の回答が最も多く114件(32.0%)、次いで“④無反応・無表情・黙り込む”が75件(21.1%)、“⑤視線を合わせない・一点を見つめる”が29件(8.1%)となった。ADHD 群(回答者数:42)では、“④無反応・無表情・黙り込む”の回答が最も多く26件(31.7%)、次いで“①動かない”が21件(25.6%)、“②逃げ込む・隠れる”が10件(12.2%)の順で回答数が多かった。DS 群(回答者数:41)では、“①動かない”の回答が最も多く37件(46.3%)、次いで“⑤視線を合わせない・一点を見つめる”が12件(15.0%)、“④無反応・無表情・黙り込む”が9件(11.3%)となった。その他群(回答者数93)では、“①動かない”が最も回答数が多く52件(30.6%)、次いで“④無反応・無表情・黙

り込む”が43件(25.3%), “②逃げ込む・隠れる” “⑤視線を合わせない・一点を見つめる”が共に19件(11.2%)であった。

「固まる」姿のみられやすさについて、項目間に差があるか検討するため、障害種ごとに $\chi^2$ 検定を行った。その結果、すべての群で有意な差がみられた(ADHD+ASD群： $\chi^2(9)=87.067, p<.01$ ;ASD群： $\chi^2(9)=294.056, p<.01$ ;ADHD群： $\chi^2(9)=78.732, p<.01$ ;DS群： $\chi^2(9)=134.500, p<.01$ ;その他群： $\chi^2(9)=156.706, p<.01$ )。残差分析の結果をTable 2に示す。すべての群

に共通して、“①動かない”が有意に多いことが示された。ASD群、ADHD群、その他群においては“④無反応・無表情・黙り込む”も他の項目より有意に多い傾向にあることが分かった。

③「固まる」状態になってしまった児童への対応

ASD+ADHD群(回答者数：46)は“2-①移動させ、クールダウン”が18件(25.0%)で最も多く、次いで“2-②その場でそっとしておく、待つ”が15件(20.8%)，“2-③時間をおいて声をかける” “1-③好きな活動を勧める”が9件(12.5%)の順で回答数が多かった。ASD群(回答

Table 1 「固まる」きっかけの合計得点、平均得点、標準偏差

項目	ASD+ADHD群(N=47)			ASD群(N=178)			ADHD群(N=42)			DS群(N=38)			その他群(N=90)		
	合計得点	M	SD	合計得点	M	SD	合計得点	M	SD	合計得点	M	SD	合計得点	M	SD
1.勝負事で負けた場面	1	0.02	0.15	56	0.31	0.84	11	0.26	0.66	33	0.87	1.28	28	0.31	0.79
2.何かに失敗した場面	18	0.38	0.68	169	0.95	1.17	49	1.17	1.25	52	1.37	1.22	88	0.98	1.18
3.大人に甘えたい、かまってもらいたい場面	44	0.94	1.13	48	0.27	0.80	0	0.00	0.00	0	0.00	0.00	15	0.17	0.59
4.前に出て発表しないとイケない場面	21	0.45	0.88	138	0.78	1.20	37	0.88	1.29	32	0.84	1.26	72	0.80	1.16
5.自分の思った通りに事が進まない場面	80	1.70	1.37	264	1.48	1.32	67	1.60	1.29	52	1.37	1.32	113	1.26	1.28
6.課題ができなさそうだと感じた場面	45	0.96	1.14	239	1.34	1.17	66	1.57	1.15	60	1.58	1.29	121	1.34	1.27
7.友達にばかにされたり、けなされたりした場面	1	0.02	0.15	45	0.25	0.74	17	0.40	0.89	16	0.42	0.95	42	0.47	1.02
8.その他	47	1.00	1.34	106	0.60	1.13	3	0.07	0.34	6	0.16	0.68	45	0.50	1.09

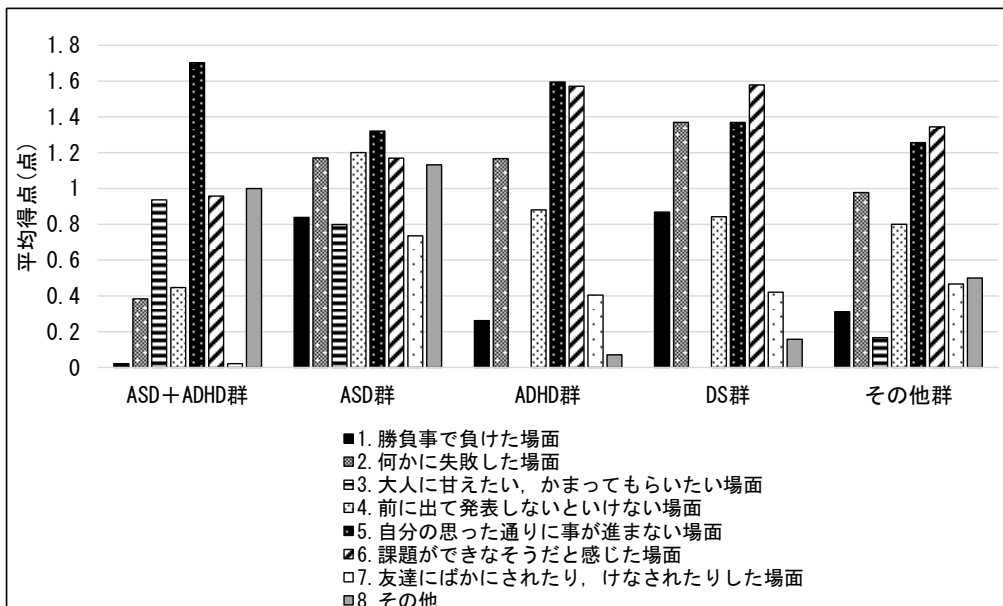


Fig. 1 「固まる」きっかけの平均得点

者数：186)は“2-②その場でそっとしておく、待つ”の回答が最も多く72件(24.7%),次いで“2-①移動させ、クールダウン”が54件(18.6%),“2-③時間をおいて声をかける”が35件(12.0%)となった。ADHD群(回答者数：41)でも、“2-②その場でそっとしておく、待つ”の回

答が最も多く18件(30.5%),次いで“2-①移動させ、クールダウン”が13件(22.0%),“2-③時間をおいて声をかける”が11件(18.6%)の順で回答数が多かった。DS群(回答者数：41)では、“2-②その場でそっとしておく、待つ”の回答が最も多く16件(25.8%),“その他”11件

Table 2 「固まる」姿の多重比較の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	群	記述数・割合	多重比較	χ <sup>2</sup> 検定
1. 移動・姿勢	①動かない (座り込む) (立ち尽くす)	ASD+ADHD群	31 (34.8%)	①>②, ③, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩	**
		ASD群	114 (32.0%)	①>②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩	**
		ADHD群	21 (25.6%)	①>③, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩	**
		ダウン症群	37 (46.3%)	①>②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩	***
	②逃げ込む 隠れる	ASD+ADHD群	7 (7.9%)	①>②	**
		ASD群	44 (12.4%)	②>③, ⑧, ⑨, ⑩/①, ④>②	***/**
		ADHD群	10 (12.2%)		
		ダウン症群	3 (3.8%)	①>②	***
	③寝転がる	ASD+ADHD群	3 (3.4%)	①>③	**
		ASD群	12 (3.4%)	①, ②, ④>③	***
		ADHD群	1 (1.2%)	①, ④>③	***
		ダウン症群	2 (2.5%)	①>③	***
	その他群	3 (1.8%)	①, ②, ④, ⑤>③	**	
2. 表情・表現	④無反応 無表情 黙り込む	ASD+ADHD群	18 (20.2%)	④>⑧, ⑨	***
		ASD群	75 (21.1%)	④>②, ③, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩/①>④	**
		ADHD群	26 (31.7%)	④>③, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩	***
		ダウン症群	9 (11.3%)	①>④	***
	⑤視線を合わせない 一点を見つめる	ASD+ADHD群	8 (9.0%)	①>⑤	**
		ASD群	29 (8.1%)	⑤>⑧/①, ④>⑤	***
		ADHD群	5 (6.1%)	①, ④>⑤	**
		ダウン症群	12 (15.0%)	①>⑤	***
	⑥泣く 泣きそうになる	ASD+ADHD群	7 (7.9%)	①>⑥	**
		ASD群	21 (5.9%)	①, ④>⑥	**
		ADHD群	4 (4.9%)	①, ④>⑥	**
		ダウン症群	3 (3.8%)	①>⑥	***
	⑦暴言 暴力 衝動的な行動	ASD+ADHD群	10 (11.2%)	①>⑦	**
		ASD群	26 (7.3%)	⑦>⑧/①, ④>⑦	***
		ADHD群	5 (6.1%)	①, ④>⑦	**
		ダウン症群	0 (0.0%)	①>⑦	***
	⑧不快な表情	その他群	7 (4.1%)	①, ④>⑦	***
		ASD+ADHD群	1 (1.1%)	①, ④>⑧	**
		ASD群	5 (1.4%)	①, ②, ④, ⑤, ⑦>⑧	***
		ADHD群	3 (3.7%)	①, ④>⑧	***
	⑨拒否語 返事のみなど	ダウン症群	0 (0.0%)	①>⑧	***
		その他群	5 (2.9%)	①, ④>⑧	***
		ASD+ADHD群	1 (1.1%)	①, ④>⑨	**
		ASD群	13 (3.7%)	①, ②, ④>⑨	***
⑩その他	ADHD群	3 (3.7%)	①, ④>⑨	***	
	ダウン症群	8 (10.0%)	①>⑨	***	
	その他群	6 (3.5%)	①, ④>⑨	***	
	ASD+ADHD群	3 (3.4%)	①>⑩	**	
	ASD群	17 (4.8%)	①, ②, ④>⑩	***	
	ADHD群	4 (4.9%)	①, ④>⑩	**	
	ダウン症群	6 (7.5%)	①>⑩	***	
	その他群	4 (2.4%)	①, ④>⑩	***	

\*\* p < .01 \*\*\* p < .001

(17.7%), “1-④安心させる声掛けをする”, “2-③時間をおいて声をかける”が7件(11.3%)であった。その他群(回答者数:89)では, “2-②その場でそっとしておく, 待つ”が32件(23.7%), “2-③時間をおいて声をかける”が23件(17.0%), “2-①移動させ, クールダウン”が21件(15.6%)であった(Table 3)。

また, 障害種によって「固まる」現象への対応が異なるかを,  $\chi^2$ 検定によって検討を行った。その結果, “その他”では障害種による有意な差が見られた( $\chi^2(4)=13.584, p=.009$ )。それ以外の項目では有意な差はみられなかった。

#### ④「固まる」状態から立ち直るまでの時間

ASD+ADHD群(回答者数:42)では“11-15分”が最も多く13件(20.3%), 次いで“6-10分”“16-20分”“21-30分”が同数の11件

(17.1%)で回答が多かった。ASD群(回答者数:174)では, “6-10分”が53件(23.5%)で最も回答が多く, 次いで“5分以内”が42件(18.5%), “16-20分”が41件(18.1%)の順で回答が多かった。ADHD群(回答者数:40)では, “6-10分”が最も多く15件(28.3%)で, 次いで“16-20分”が11件(20.8%), “11-15分”が10件(22.7%)の順で回答が多かった。DS群(回答者数:36)では, “6-10分”が最も多く16

件(36.4%)で, 次いで“5分以内”が14件(13.8%), “11-15分”が5件(11.4%)の順で回答が多かった。その他群では“6-10分”が最も多く28件(29.1%)で, 次いで“5分以内”が25件(26.0%), “11-15分”が13件(13.5%)の順で回答が多かった(Table 4)。

障害種ごとに $\chi^2$ 検定を行い, 回復までの時

Table 3 障害種ごとの「固まる」現象への対応

大 カテ ゴリ	小 カテ ゴリ	ASD+ ADHD 群 (72件)	ASD群 (291件)	ADHD群 (59件)	DS群 (62件)	その他群 (135件)
積極的介入 1:行動促進に向けた	①話を聞く, 気持ちの言語化	3(4.2%)	25(8.6%)	4(6.8%)	6(9.7%)	8(5.9%)
	②別課題や方法の提示	6(8.3%)	29(10.0%)	4(6.8%)	2(3.2%)	15(11.1%)
	③好きな活動を勧める	9(12.5%)	22(7.6%)	3(5.1%)	6(9.7%)	10(7.4%)
	④安心させる声掛けをする	3(4.2%)	20(6.9%)	1(1.7%)	7(11.3%)	8(5.9%)
受容的対応 2:行動停止を容認する	①移動させ, クールダウン	18(25.0%)	54(18.6%)	13(22.0%)	5(8.1%)	21(15.6%)
	②その場でそっとしておく, 待つ	15(20.8%)	72(24.7%)	18(30.5%)	16(25.8%)	32(23.7%)
	③時間をおいて声をかける	9(12.5%)	35(12.0%)	11(18.6%)	7(11.3%)	23(17.0%)
	④見通しを伝える	2(2.8%)	16(5.5%)	4(6.8%)	2(3.2%)	7(5.2%)
その他		7(9.7%)	18(6.2%)	1(1.7%)	11(17.7%)	11(8.1%)

単位(件)

Table 4 障害種ごとの回復するまでにかかる時間

	5分以内	6-10分	11-15分	16-20分	21-30分	31分以上
ASD+ADHD群	9(14.1)	11(17.1)	13(20.3)	11(17.1)	11(17.1)	9(14.1)
ASD群*	42(18.5)	53(23.5)	39(17.3)	41(18.1)	37(16.4)	14(6.2)
ADHD群	8(15.1)	15(28.3)	10(22.7)	11(20.8)	3(5.7)	6(11.3)
DS群*	14(31.8)	16(36.4)	5(11.4)	4(9.1)	4(9.1)	2(4.5)
その他群**	25(26.0)	28(29.1)	13(13.5)	12(12.5)	13(13.5)	5(5.2)

\*: p < .01 \*\*: p < .001 単位(件(%))

間に差がみられるか検討した。その結果、ASD+ADHD群、ADHD群では有意差はみられなかった。それ以外の群では有意な差がみられた (ASD群： $\chi^2(5)=21.965, p<.01$ ；DS群： $\chi^2(5)=23.400, p<.01$ ；その他群： $\chi^2(5)=23.750, p<.01$ )。残差分析の結果、ASD群では“31分以上”が有意に少なく、DS群では“6—10分”が“31分以上”より有意に多く、その他群では“5分以内”“6—10分”が“31分以上”より有意に多かった。

#### ⑤「固まる」状態から回復する際の様子

ASD+ADHD群(回答者数：41)は“①何事もなかったかのように活動に参加する”と“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”の回答が最も多く11件(21.6%)、次いで“③少しずつ話始める・質問に答え始める”が9件(17.6%)の順で回答数が多かった。ASD群(回答者数：181)も同様に“①何事もなかったかのように活動に参加する”の回答が最も多く50件(24.4%)、次いで“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”が47件(22.9%)、“③少しずつ話始める・質問に答え始める”が37件(18.0%)の順で回答数が多かった。ADHD群(回答者数：41)では、“①何事もなかったかのように活動に参加する”の回答が最も多く13件(25.5%)、“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”が12件(23.5%)、“③少しずつ話始める・質問に答え始める”が11件(21.6%)の順で回答数が多かった。DS群(回答者数：41)では、“①何事もな

かったかのように活動に参加する”の回答が最も多く16件(39.0%)、“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”が8件(19.5%)、“③少しずつ話始める・質問に答え始める”が6件(14.6%)の順で回答数が多かった。その他群では、“①何事もなかったかのように活動に参加する”が24件(24.7%)、“⑥その他”が16件(18.6%)、“②固い表情のまま・少しずつ活動に参加する”と“③少しずつ話始める・質問に答え始める”が16件(16.5%)であった(Fig.2)。

障害種によって回復の様子が異なるかを $\chi^2$ 検定によって検討した結果、有意差はみられなかった。次に、群内比較を行ったところ、ASD群、DS群、ADHD群、その他群において有意差がみられた。

#### IV. 考察

「固まる」きっかけとなる場面については、障害種にかかわらず、「自分の思った通りに事が進まない場面」「課題ができなさそうだと感じた場面」「何かに失敗した場面」が多いという結果が得られた。「自分の思った通りに事が進まない場面」や「何かに失敗した場面」では、自分の想定と異なる展開に柔軟に対応できず、次にどのように行動すれば良いのかわからなくなってしてしまうこと、「課題ができなさそうだと感じる場面」では、課題遂行のための手順・方略

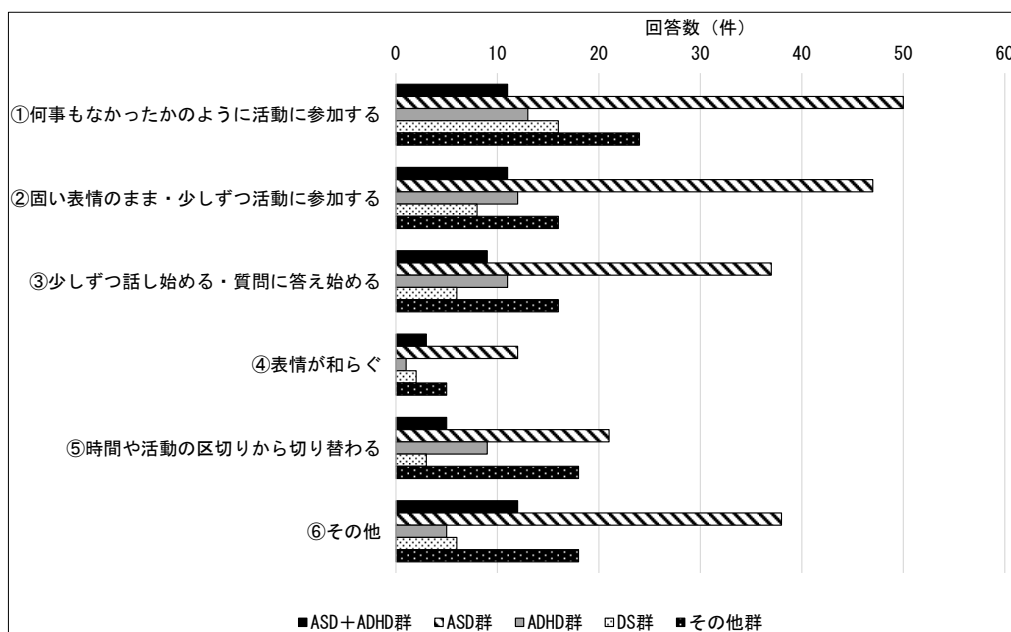


Fig. 2 「固まる」状態からの回復の様子

のイメージを持っていないこと、できないことに対する不安等が心理的な負荷になっていると考えられる。発達障害のある児童にとって見通しの立たない事への不安は大きく、その不安が「固まる」という形で表出していると推察される。そのため、特に児童が苦手意識のある活動の前には、手本を見せる、手順を示すといった、見通しをもつための支援をより手厚く行うことが「固まる」状態になりにくくするために有効であると考えられる。また、「固まる」状態になってしまった際も、次に何をすべきか声掛けするなど、児童自身が今の状況や、その後の行動について把握できるように支援することが回復に繋がると考えられる。

また、「自分の思った通りに事が進まない場面」は、自分の要求を通したい場面であるとも解釈できる。「大人に甘えたい・かまってほしい場面」もこれに該当するといえる。そのような場合には、「固まる」が不適切な要求行動として表出している状態であるため、「固まる」状態になっても要求は通らないのだと理解できるように対応をするとともに適切な要求行動ができるような支援を行う必要があるといえる。

「固まる」際の姿で最も多く見られたのは「動かない(座り込む・立ち尽くす)」と「無反応・無表情・黙り込む」であった。この二つはほとんどの回答者が該当すると回答していることから、「固まる」状態になった際には行動・反応の停止と表情の消失が同時に生じやすいと考えられる。また、今回の調査では「固まる」際の様子として「暴言・暴力・衝動的な行動」というカテゴリーが抽出された。一見すると相反する様子ようであるが、「暴れる様子が見られた後に固まって動かなくなる」「固まったり、暴れたりを繰り返す」などと、「固まる」という内向的な感情表出と、「暴れる」などの外向的な感情表出を一連の流れで行う児童がいることが示唆された。

「固まる」現象への対応は、どの障害種においても「その場でそっとしておく、待つ」「移動させ、クールダウン」が多いという結果が得られた。教員は「固まる」児童に対して、積極的に介入を行うよりも、気持ちを落ち着ける環境を整えたり、時間をとったりする対応を行うことが多いといえる。「固まる」状態になっている際はコミュニケーションをとることができなくなってしまっていることが多く、すぐに働きかけをしても動くことができないことから、しばらく時間をおいてから働きかけを行う流れ

になることが考えられる。他児の目が刺激となることを避け、一人になれる時間を作って気持ちを落ち着ける対応が行われることが多いといえる。また、「別課題や方法の提示」「好きな活動を勧める」といった「切り替える」意味合いのある対応も行われていた。気持ちの切り替えは、発達障害のある児童が苦戦しやすいスキルのひとつである。切り替えができるようになることで、固まってからの回復が早くなるだけでなく、感情コントロールの向上にも繋がるのではないだろうか。

今後の課題として、児童の障害の程度や、児童をとりまく環境等についても考慮した上で、「固まる」現象についての検討を行う必要がある。本研究では、対象児の知的障害の程度や言語発達については詳細を把握できていない。しかし、これらは児童の状況に対する認識度にも関連し、「固まる」現象の起こりやすさに影響することが予想される。また、「固まる」現象への支援にあたり、児童に関わる環境面、特にその場における情緒的な安心・安定感、所属感、周囲との信頼関係などを把握することによって、どのような関係の中で指導者がこの現象や行動に対応しているか、または対応すべきかがわかるため、今後こういった視点を踏まえ、調査すべきであると考えられる。

## 文 献

- 1)菅野希倭・橋本創一(2016):通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ. 67, 311-317
- 2)文部科学省(2021):障害のある子供の教育支援の手引—子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて—. [https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt\\_tokubetu01-000016487\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_tokubetu01-000016487_02.pdf)(2022年8月30日取得)
- 3)文部科学省(2022):令和2～3年度 特別支援教育に関する調査の結果について. [https://www.mext.go.jp/content/20220905-mxt\\_tokubetu01-000023938-9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220905-mxt_tokubetu01-000023938-9.pdf)(2022年8月30日取得)
- 4)清水裕士(2016):フリーの統計分析ソフトHAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73

(受稿 2022.9.22, 受理 2022.11.10)